

ゼカリヤ書9章9節 「ろばの子に乗られる王」

1A 大いなる喜び

1B 神の娘として

2B 王として

2A 正しい方

1B 救いを賜る方

2B 柔和な方

3B 雌ろばの子

1C 何でもない動物

2C 平和をもたらす方

本文

ゼカリヤ書 9 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは先週で、8 章まで来ました。午後に 9 章から 11 章までを一節ずつ読みます。ここには、麗しいキリストの預言があります。私たちはその一つを今朝読みます。9 章 9 節です、「シオンの娘よ。大いに喜び。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに來られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。」

私たちは来週、クリスマス礼拝を守ります。イエス様が、お生まれになったことを覚えて、主を礼拝する時です。その時も、へりくだった姿でおいでになりました。宿屋も見つからない貧しいユダヤ人夫婦が、家畜小屋で赤ん坊が生まれました。しかし、この方を王として人々が拝みに来ました。今、読んだところは、イエス様が十字架で死なれる最後の週の日曜日、オリーブ山からイエス様がろばの子に乗って、エルサレムの城に入られたことによって、成就した預言です。それを先ほど、交読文で読みました、マタイ 21 章 1-9 節の部分です。王がどうして、そのようなへりくだった姿で來られるのか？不思議に思います。しかし、私たちの生きている世は、人々に注目されたり、高い地位に付けば、それだけ力をふるまうということが当たり前になっています。しかしイエス様は、逆のことを言われています。静かに柔和でいることのほうが、後々には、権力者が倒れるというものを見ることができるのです。そして柔和な姿で來られたイエス様が、世界を完全に変える力を持っておられました。

ところで、ゼカリヤ書 9 章後半には、ユダヤ人たちがギリシヤ人に対して勇敢に戦う預言が書かれています。それは、マカバイ家の戦いといって、ギリシヤの王安ティオコス・エピファネスがユダヤ人を迫害して、神殿礼拝を汚したのですが、それで彼らは戦い、ついに神殿を清め、新たに主に捧げることができました。その神殿奉献祭を「ハヌカー」と言います。イエス様はこの時に、「わ

たしは世の光です。」と言われて、そこに灯される燭台の光は、ご自身のことを表していることを教えられました。それが今です。私たちキリスト教会はクリスマスはこの時期はお祝いしますが、ユダヤ人たちはハヌカーをお祝いします。このことについては、午後礼拝でお話ししましょう。

1A 大いなる喜び

1B 神の娘として

初めに、「シオンの娘よ。大いに喜び。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。」とあります。このようにエルサレムの人々に主が呼びかけている預言は、初めてではありません。ゼパニヤの預言にもありました。「ゼパニヤ 3:14 シオンの娘よ。喜び歌え。イスラエルよ。喜び叫べ。エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ。」なぜ、そこまで喜び歌い、喜び叫ぶことができるのか？主が、エルサレムにいる者たちを「娘」と呼ばれています。そこには、二つの意味合いがあります。一つは、神が父であられるということです。神が、エルサレムにいる者たちをご自分の子どもとみなしておられるということです。父のように、主がエルサレムに来てくださいました。それゆえ、お父さんが帰って来た！ではないですが、自分を愛し、養い、守ってくださる方が、今、ここにいるのだというところに、大きな喜びがあります。神ご自身から、娘よ、あるいは息子よと呼ばれるのです。

イエス様は、私たちが神に祈る時に、「天にいます私たちの父よ」と呼びかけるように命じておられます。それは、他の異邦人と同じように言葉を繰り返してはいけなからです。「マタイ 6:7-9 また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多いければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。』私たちは、自分が誰に祈っているのかを、はっきりさせる必要がありますね。ともすると、何度も繰り返して、訴えなければ、聞いてもらえない存在だと思ってしまう。自分の熱心な祈りの努力によって、なんとか聞いてもらえると思ってしまう。実際のことですが、私はかつて、「祈り倒す」という言葉を聞きました。祈って祈って、あきらめないという意味合いで使ったのだと思いますが、祈って、神を倒すのかい？とあって、ずいぶん失礼な言い方だと思いました。

そうではありませんね、自分の神が自分の父だと分かれば、その時に全幅の信頼をもって、人格のある方として祈ると思います。なぜなら、父なる神は自分がお願いする先に、自分に必要なものを知っておられるからです。そしてその前に、主は人の前に聞かせるように祈ることについても、戒めています。他の人が自分がいかにも霊的であるかのように、言葉を選んで聞かせるようにして祈るのも、間違っていることを話しておられます。奥まった部屋で、戸を閉めて祈りなさいとイエス様は言われますが、それは祈りを隠せということではなく、「隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(6:6)」とされているからです。親密な父との関係の中で祈りなさいと命じておられます。

イエス様は絶えず、神をご自分の父であると言及されました。神殿を商売の場所にしているの
で、そこにある両替人の台を倒したり、牛や羊を追い出したりされた時に、「それをここから持って
行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。(ヨハネ 2:16)」と言われました。神殿のこ
とを、「わたしの父の家」と言い切ってしまうたのです。ユダヤ人たちは、そこで畏れ多い神を礼拝
するために来ているのに、その神を「わたしのお父さん」と言い切ってしまったところに、彼らはそ
れを冒瀆に感じたのです。それは、イエス様が神と同等にしたこともあります。そうした親密さ
に対して腹を立てました。そして父なる神も、イエス様がバプテスマを受けられた時、また高い山で
イエス様が栄光の姿に変貌した時、「これは、わたしの愛する子。」と呼ばれて、ご自分の父として
の愛を示されたのです。

そしてイエス様は、この親密な関係の中に、ご自分の弟子たちを招き入れたいと願われました。
ご自分が甦られてからは、もはやイエス様に話して、そしてイエス様が父なる神にお願いするの
ではなく、直接、父に語りかけなさい。わたしの名によって語りなさい、そうすれば直接、聞いてくださ
ることを話してくださいました。「ヨハネ 16:23 その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋
ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父
は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。」そして、イエス様は甦られました。
マグダラのマリヤに語られた時に、こう言われたのです。「20:17 わたしの兄弟たちのところに行っ
て、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに
上る。』と告げなさい。」イエス様は、神をご自分の父としておられるように、今度は、イエス様が弟
子たちの兄弟となってくださって、彼らが神を父と呼ぶようにしてくださいました。つまり、御父と御
子の間にある交わりに、彼らが招き入れられたのです。イエス様が、一番上のお兄さん、長子とな
って、私たちが神を父とした養子になることを許してくださいました。(ローマ 8:29)いかがでしょ
うか、私たちは祈るのが、億劫に感じる場合がありますね。けれども、この方が父だと知れば、自ら
祈りたいと願うはずで。

そして、ここで「シオンの娘」「エルサレムの娘」と主が呼ばれているのは、父としてという意味合
いではなく、ご自分と結ばれる妻としての呼びかけかもしれません。若い娘を一人の男が見つけ
て、「お嬢さん、どうしましたか？」と尋ね、その女の子を育て、そして成長した時に契りを結ぶとい
うイメージです。これは、エゼキエル書 16 章にその比喩が出てきました。道端で、へその緒も着ら
れることなく、自分の血の中でもがいている赤ん坊を見て、主は、「生きよ。」と呼びかけられました。
そして彼女は育ち、恋をする時期になっていました。そして、「わたしは衣のすそをあなたの上に広
げ、あなたの裸をおおい、わたしはあなたに誓って、あなたと契りを結んだ。(8 節)」とあります。そ
して、豪華な着物を着せて、飾り物で飾り、彼女が非常に美しくなり、女王の位についたとあります
(13 節)。ところが、その美しさや富を使って、他の男たちに姦通し、ついに最後は棄てられた身と
なりました。これは、エルサレムの姿を示していました。女王の位についたというのは、ソロモンが
王の時に、平和と繁栄がエルサレムから国中に、また周囲の国々に広まっていたからです。しか

し、彼女は他のところのところにいき、ついに皆から捨てられます。そこで主は、こう言われます。「あなたの若かった時にわたしと結んだわたしの契約を覚え、あなたととしえの契約を立てる。(60 節)」主は、そこでエルサレムをご自身の娘と呼んでおられます。私たちが、もし主から離れてしまっているのであれば、主は呼び寄せておられます。そして、再び親しい交わりをしたいと願われています。

ですから、主は、父として、また夫として、私たちのところに来たいと願われています。そして、そこには大いなる喜びがあります。主との関係が回復するという喜びです。主にあつて、喜び勇むとハバククはかつて言いました。何か状況が良くなるから喜ぶのではなく、むしろ状況が悪いのに、試練があるのに、それにも関わらず喜ぶことのできる源泉は、主との関係です。

2B 王として

そして、もちろん「**あなたの王があなたのところに来られる。**」ということで、喜んでいます。私たちは、王としてお迎えするということが、何が喜ばしいことなのでしょう？ 群衆たちは、「ホサナ！」と叫びました。私たちが救ってください、という意味です。今の自分の束縛されているところから自分を救い、その自分を奴隷にしている、抑圧している者を押しつぶしてくださるからに他なりません。そうやって王は、救い主として、解放した町に入城し、人々に迎え入れられます。しかし、イエス様がエルサレムに入城された時、その数日後には同じ群衆が、「十字架につけろ」と騒ぎ立てます。それは、自分たちの願っているとおりの王ではなかったからです。自分の願いが利かれないのであれば、それは王ではないとしたことなのです。けれども、自分の願いをきくような王であれば、もはやそれは王ではないのではないのでしょうか？ 自分が王であり、その王を自分の僕にしていることではないのでしょうか？

私たちは何に束縛されているかと言えば、罪であり、その報酬の死であります。どんなに自分が願っていること、肉で欲していることが満たされたとしても、そこには自由がありません。むしろ、そんなことを欲して、満たそうとしても満たされない、その墮落した自分からの解放こそが、自分を喜ばせません。イエス様は王として、暗き世に来てくださいました。そして、私たちが罪と死の縄目から解放してくださいました。「ヘブル 2:14-15 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。」自分自身にある嫌なこと、取り除けない罪、肉の思い、これらを解放する王となってくださいます。

2A 正しい方

そして、「**この方は正しい方で**」と預言しています。王が正しい方であるということには、魂の底から喜びがあります。多くの人は、王と言え、そこに苦しめられるという思いが出てきます。それは

権力を持った者であれば、その権力をふるって、その上に王がいること、つまり神がおられることを知らないからです。神を恐れているものであれば、へりくだって、公正に自分の下にいる者たちを治めるはずで、全体的な主権者が、正しい裁きが行なわれる時に私たちには、魂の奥底からの喜びがあります。黙示録 19 章、クリスマスの時期になるとよく歌われるヘンデルのメサイアがありますが、そこは正しい裁きを神が行なってくださったことに対する、大歓声であります。「19:1-2 この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によって地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

1B 救いを賜る方

そして、「**救いを賜わり**」とあります。主は正しいからこそ、人を救うことができます。イザヤが預言しました。「イザヤ 45:8 天よ。上から、したたらせよ。雲よ。正義を降らせよ。地よ。開いて救いを実らせよ。正義も共に芽生えさせよ。わたしは主、わたしがこれを創造した。」正義が雲から雨が降ってくるようにふりなさい。それで、救いが実ります。それから救いと共に正義も地に芽生えます、ということです。

ここで主は、私たちが正しくなれば救われるとは言うておられません。むしろイザヤの預言、また他の預言者たちは口を揃えて、私たちは不義にまみれていると教えます。主が言われているのは、「わたしに義がある。わたしの義によって、あなたがたを救う。」ということです。私たちの義ではなく、神の義によって、神は私たちを救うことができになるのです。神が、ご自分の正しい怒りを、ご自分の御子キリストに代わりに満たされることによって、神は正しく裁かれ、かつ私たちを恵みによって無罪とすることがおできになるのです。「ローマ 3:25-26 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。」もう一度、繰り返しますが、私たちを救うのは、私たちの義ではありません。神が義だからこそ、神がキリストにあって正しい裁きを示され、それで私たちを義とみなすことができるようにしてくださったのです。それで、私たちが神を信じて生きるのです。神の恵みによって生き、それを知って、成長するのです。

2B 柔和な方

そして、「**柔和で**」とあります。これは何と、苦しんでいる、悩んでいるという言葉と同じなのだそうです。「53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」このイザヤの預言の、「痛めつけられた」「苦しんだ」という言葉と同じ言葉が使われているそうです。主は、エルサレムに入城されて、そのおそらく五日後に十字架に付けられました。そこで、主は不当な扱いを受けられ

ましたが、正しい裁きを父なる神に任せられました。復讐をしない、そのまま受け入れるというところに、柔和さがあります。単なるやさしさではなく、仕返ししない柔らかい心のことを指しています。私たちは、このへりくだった方から、学びなさいと命じられましたね。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。(マタイ 11:29-30)」

3B 雌ろばの子

1C 何でもない動物

そして最後に、「**ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。**」と言われます。馬に乗って、入城するお姿ではなく、ろばの子、しかも雌ろばのろばの子に乗られます。ろばというのは、聖書で王が乗っている時は二つの意味があります。一つは、「何でもないこと」です。そうです、何の変哲もない、普通に移動している時です。ダビデがアブシャロムによる反乱、クーデターでエルサレムから出て行く時に、ろばに乗って動かれました。そこには、戦う意志はありません。ただ移動の手段であります。しかも、雌ろばの子であるとありますから、なおのこと弱き存在であることを強調しています。主は、弱き私たちのことを同情できない方ではありません。その何でもない自分に、寄り添うことのできる方です。

2C 平和をもたらす方

もう一つ、平和を象徴しています。それは、ソロモンが王となる時にそうであったからです。「1列王 1:38-40 そこで、祭司ツアドクと預言者ナタンとエホヤダの子ベナヤ、それに、ケレテ人とペレテ人とが下って行き、彼らはソロモンをダビデ王の雌騾馬に乗せ、彼を連れてギホンへ行った。祭司ツアドクは天幕の中から油の角を取って来て、油をソロモンにそそいだ。そうして彼らが角笛を吹き鳴らすと、民はこぞって、「ソロモン王。ばんざい。」と叫んだ。民はみな、彼のあとに従って上って来た。民が笛を吹き鳴らしながら、大いに喜んで歌ったので、地がその声で裂けた。」ソロモンは、そして平和を確立しました。ソロモンの名前は、シャロームから来ています。平和から来ています。

ですから、ゼカリヤ書 9 章 10 節には、こう続くのです。「わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶やす。戦いの弓も断たれる。この方は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大川から地の果てに至る。」これは再臨の時に実現しますが、しかし、へりくだった方、ろばの子に乗られる王であるからこそ、後にこのような世界に広がる平和が約束されているということです。私たちが、平和を造る者は幸いです、その人は神の子と呼ばれるとイエス様が言われましたが、平和を造る者とはどういうことかをクリスマスが近づいたこの時期に考えてみましょう、祈り求めてみましょう。自分がへりくだった方を王とする時に、自分の弱さからむしろ、神の強さが現れます。自分のへりくだりから、むしろ神の栄光が現れます。肉の行ないが殺される時に、御霊の働きが顕著に出てきます。こうやって私たちが低められる時に、むしろ神の名が高められるので、自分自身も高められます。